

(1798) M. M. Warburg & Co. → (1941) Brinckmann, Wirtz & Co. → (1970)  
M. M. Warburg · Brinckmann, Wirtz & Co. → (1991) M. M. Warburg & Co.

(注2) 筆者の西独初代トレーニーの期間は下記のとおりである。

1963年9月～12月：Goethe Institut, Iserlohn. ドイツ語研修。

＊ 12月～1974年9月：Dresdner Bank-AG (Düsseldorf, Berlin,  
Hamburg, Frankfurt/M. Düsseldorf) 研修。

1964年9月～11月：Brinckmann, Wirtz & Co Hamburg 研修。

＊ 12月：三井銀行ロンドン支店研修および欧州各地主要銀行21行訪問  
後帰国。

(注3) 書目⑧の Auszeichnungen (日本篇) は本論集第27巻第4号 (1993年3月)  
pp. 97～115に全文訳出済みである。

(注4) “Bank Lexikon” Betriebswirtschaftlicher Verlag, Wiesbaden 1963年版の  
「Privatbankier」項目を適宜抜萃，下記訳出する。

『個人銀行業。法的性格は個人業，合名会社，合資会社および近時は有限  
会社もある。19世紀初頭の工業金融や国際金融業務の発現期には，この銀  
行業は比類なき伸長と勢威を示した (例，ロスチャイルド)。しかし，次  
第に産業要資や鉄道建設等が巨費を要するに至り，この銀行業は株式会社  
形態の大銀行を設立したり，大産業プロジェクトの金融方式の組成，幹事  
銀行役，協調融資組成などで依然，ぬきんでた指導性と勢威と金融幹旋能  
力を示した。第一次大戦後の投機的環境の中で，この銀行業は本来的に業  
務の増進と盛名をあげたが，1931年の金融恐慌はこれらの多くを破滅させ，  
株式会社大銀行に吸収されて消滅した。この銀行業数は1913年1,220行，  
1924年1,406行，1935年709行，1938年520行で現在 (63年) 204行にまで縮  
減した。彼等の強力な業務範疇は顧客との親密関係，個人大口資産運用，  
国際金融，投資顧問，財務管理，証券取引等であるが，次第に株式会社大  
銀行およびその拡大するリテイル業務に圧迫を受けて守勢である。戦後の  
これら銀行業の総資産の推移は下表のとおり。

1953 (2,377百万DM)，55 (2,942)，57 (3,898)，59 (5,952)，61  
(6,782)，62 (7,156)』

(注5) 住居地名，商標を姓名としたのは当時通常の命名法である。

赤い楯 (Rothschilds)，ヴィンチ村のレオナルド (Leonardo da Vinci) 等。

(注6) 会を開いたのは米金融会社スパイヤーズのロンドン支店長ヒルで，来日の  
折，高橋と会っており，内心快々たる高橋日本帝国財務官兼日銀副総裁を  
慰め，かつ5百万ポンドの内約成功の内祝である。

(注7) 当時パース銀行のロンドン支店長は，日本でも有名なシャンドで，馬車で  
迎えに来た。

(注8) クラリッジは現在でも伝統的な第一流ホテル。ザ・クラリッジともいう。

(注9) 書目⑤山川教授は13億円と推定されている。

(注10) 銃弾数発と片腕が斬り落されていた惨状 (法廷記録一日比谷図書館蔵)。

(注11) 本論集第27巻第4号拙稿。

(注12) Max M. Warburg はベルリン外務省でツインマーマン次官に面談 (注11と  
同じ)。

(注13) Dr. Otto Jeidels “Das Verhältnis der deutschen Grossbanken zur Industrie

mit besonderer Berücksichtigung der Eisenindustrie" 1905, Leipzig  
 訳書：長坂聰，勁草書房1984『ドイツ大銀行の産業支配』である。  
 なお，その詳細な評価に斉藤晴造『ドイツ銀行史の研究』法政大学，1977  
 がある。

- (注14) 1974年の I. D. Herstatt 個人銀行の倒産は今でも，この銀行自体の放漫経営  
 ぶりよりも，ドイツ連邦銀行監督局ベルリンの銀行破綻処理手法の拙劣例  
 として記憶されている。その後，個人銀行は相ついで大銀行に吸収・買収  
 され，現在50行前後となっている。なお，当時のユダヤ系個人銀行の数は  
 定説がないが，33年末約200行は諸資料からみて妥当と考える。
- (注15) Horace Greely Hjalmar Schacht (1877～1970)：ドイツ財政家。1923年ハ  
 イパーインフレの収束のための通貨改革に成功。ヒトラー政権で経済相，  
 ライヒスバンク総裁を歴任。ヒトラー末期，叛旗をひるがえし離反。戦後，  
 ニュールンベルク戦犯裁判で無罪判決。
- (注16) 米 Reynolds Metal Company of Virginia は英 Tube Investment と組み British  
 Aluminium Company を乗っ取った1959年初の世紀的な M & A 合戦。
- (注17) H. ゲーリングの傲然たる最後の姿が空港で米軍に写真にとられている。
- (注18) Max は筆者に書目⑳を渡しながら，Brinckmann 派との「戦争」は全てこ  
 れに書いてあると語った。亡父 Eric の怨念でもある。なお，Max のドイ  
 ツ銀行界の人物批評は文字どおり「歯に衣をきせず」式で，彼のドイツ銀  
 行現代裏面史は抱腹絶倒的コメントに満ちていた。話は政府，ブンデスバ  
 ンク・大産業界人事往来を含むものであった。アメリカ生まれのユダヤ系  
 ドイツ国籍のプライベート・バンカーとは，おそらく世界最高水準の人世  
 洞察家であるのであろう。超辛口の皮肉が機関銃弾のように欧州政界・財  
 界指導者層月旦評として掃射された。まことに明解かつ爽快な体験であっ  
 た。
- (注19) 『ヒトラーでさえも38年に Max M(祖父)をドイツ銀行界から締め出したの  
 ですが，アメリカとの開戦の1941年まで，銀行名の改称を延期させたので  
 す。何が恐いかといえば，われわれの銀行の背後にあるアメリカと世界の  
 ユダヤ人の連帯がやはり気がかりだったのです。ヒトラーでもためらった  
 のに，プリンクマンは最後まで自分の名前に Stick していたのです』1999  
 年 Max の言。
- (注20) 注14参照。その直後，Düsseldorf の当時最大の Privatbankier であった  
 C. G. Trinkaus は米銀の手に落ち，連邦銀行監督局は世界中から監督責任  
 を問われ，個人銀行監視強化にのりだした。詳細，拙著「金融不安」1998，  
 講談社参照。

#### [同行経営者略歴]

書目⑳末尾掲載の同行歴代経営者のうち，本文関係分を抜萃して下記に訳出した。

##### 1. Moses Marcus Warburg

1763年ハンブルク近郊アルトナに生まる。1831年11月14日逝去。弟の Gerson と  
 共に1798年ハンブルク市に M. M. Warburg & Co. 銀行創設。

##### 2. Gerson Warburg

1765年アルトナ生まれ。1825年ハンブルクにて逝去。兄の Moses Marcus と共に

父 Gumprich Marcus Warburg の家業の両替商を引き継ぎ、M. M. Warburg & Co. 銀行の創業者兼共同所有者になる。

3. Abraham Samuel Warburg

1798年4月30日、ハンブルク生まれ。同市にて1856年7月8日逝去。1829年叔父の Moses Marcus Warburg によって同銀行のパートナーに任命され、1829年2月11日、叔父の娘 Sara と結婚。

4. Sara Warburg

1805年ハンブルク生まれ。1884年10月10日同市にて逝去。1856年夫の Abraham Samuel 死去により銀行経営権を承継、1865年まで経営に当る。

5. Siegmund Warburg

1835年4月4日、ハンブルク生まれ。同市にて1889年5月13日逝去。Abraham Samuel と Sara Warburg との長男。母から1856年に同行総支配人に任命され、1859年パートナー（所有者）に就任した。（ジークムント家家祖）

6. Moritz Warburg

1838年3月8日、ハンブルク生まれ。同市にて1910年1月29日逝去。Siegmund Warburg の弟。母の Sara によって1862年12月31日、同行の次席パートナーに任命され、兄の Siegmund と共に同行経営権を1865年に承継した。（モーリッツ家の家祖）

7. Max M. Warburg

1867年6月5日、ハンブルクに生まる。1946年12月26日、米国ニューヨーク市にて逝去。Moritz Warburg とその妻、Charlotte (旧姓 Oppenheim) の次男。1893年同行のパートナー就任。1897～1903年までハンブルク商事裁判官、1904～1919年までハンザ同盟ハンブルク市議会議員、1903～1933年までハンブルク商工会議所役員、1904～1925年までハンブルク証券取引所代表役員。1919～1925年まで中央銀行ライヒスバンク中央委員会委員。1924～1933年までライヒスバンク代表理事。1902～1934年までベルリン所在、全ドイツ銀行・銀行家協会代表役員、1919年ヴェルサイユ講和会議ドイツ側財政金融専門委員、1927年以後、ドイツユダヤ人救助連盟の代表役員、1935～38年は同連盟会長。1934～38年、ドイツ帝国ユダヤ人協議会代表委員、1938年ナチスの圧迫により、M. M. Warburg & Co. 銀行頭取兼パートナーより退任を強制され、同年8月、米国に亡命。

8. Paul M. Warburg

1868年8月10日、ハンブルク生まれ。1932年1月24日、ニューヨークにて逝去。Max M. Warburg の弟。1895～1914年まで同行パートナー。1900～1902年までハンブルク市会議員。1902年ニューヨークに移り、1902～1914年まで Kuhn, Loeb & Co. 銀行の共同パートナー就任。1912年米国に帰化。米連邦準備制度の共同創立者となり、1914～1918年までワシントン D. C. の連邦準備制度理事会理事。1921～26年まで同理事会諮問委員会委員、1925年までその副会長。ニューヨークに設立の International Acceptance Bank の共同創立者兼監査役会会長。

9. Fritz M. Warburg

1879年3月12日、ハンブルク生まれ。1964年10月13日、イスラエルの Nezer Sereni にて逝去。Max M. Warburg の弟。ベルリン大学にて法律を学び、上級公務員試験通過者および法学博士。1907～1938年まで M. M. Warburg & Co. の共同パートナー。1915～1919年までストックホルム駐在ドイツ帝国スエーデンおよびノルウェ